

rgb ++

2018 exhibition vol.10

展覧会記録冊子

門田 光雅 KADOTA Mitsumasa

菊池 遼 KIKUCHI Ryo

佐竹 宏樹 SATAKE Hiroki

末永 史尚 SUENAGA Fuminao

常田 泰由 TOKIDA Yasuyoshi

西平 幸太 NISHIHIRA Kota

原田 郁 HARADA Iku

堀 由樹子 HORI Yukiko

村林 基 MURABAYASHI Motoi



「「rgb++ 2018」展に寄せて

「rgb+」展は今年 10 回目を迎える。

絵画専攻の授業運営を日常的にサポートしてくれている助手、その彼女 / 彼らには主体として追い求める〈制作〉がある。その彼女 / 彼らの活動、〈制作〉そのものを照射したいとの思いの一心で 2009 年に第一回助手展「rgb+」は企画されたのだった。

「rgb+」と名づけられた展覧会は、作品展示とともに、トークショー、ディスカッション、ワークショップなどさまざまな関連企画も催され、その都度、表現そのものへの内省と表現の現在が明示されてきた。それらは毎回リーフレットとして作成され、記録化とともに回を重ねられてきている。

この間、彫刻専攻でも助手展が開かれ、今は大学主催の全専攻の助手展も開催されるようになった。そしてこの 10 年、大学の外側のアートシーン、さらにアートの外側の現実の社会もすっかり様変わりした。

本展「rgb++ 2018」では、ZOKEI ギャラリーと CS ギャラリーの 2 会場を使用、現助手に加えて、かつて助手を勤めその後、作家としてのキャリアを積み、現在、造形大で教職にある作家を迎えての展示となった。それがタイトル「rgb+」に「+」が重ねられているゆえである。第一回展開催に際して「rgb」と名づけてくれた作者も今回参加してくれている。さてその本学のスクールカラーでもある「rgb」とは、色の三原色 (red, green, blue) であり、いわば網膜上に現れる観念的な色である。対して色材の三原色 (赤、青、黄) による絵画実践、実体ある絵画と格闘する画家がなぜ「rgb」なのか？興味を尽きることはなく、次々と課題を提起し続けるのである。

会期中は、さまざまな企画が関連企画として展開していくことになる。

是非ご高覧、ご参加下さい。

2018 年 10 月 東京造形大学教授 母袋俊也

【出品作家】

・現助手
菊池遼

・助手出身ゲストアーティスト

門田光雅
佐竹宏樹
末永史尚
常田泰由
西平幸太
原田郁
堀由樹子
村林基

【関連企画】

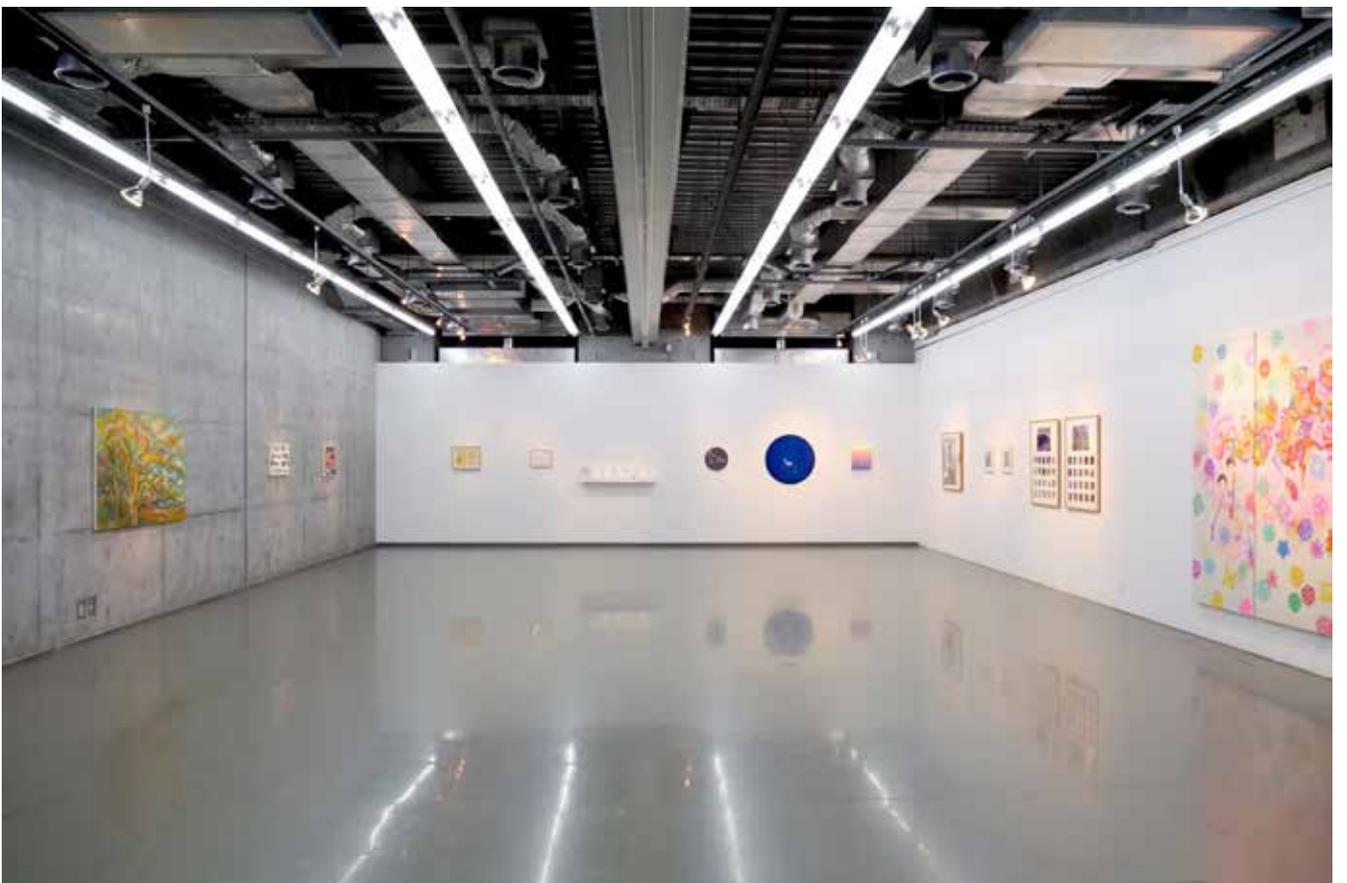
関連企画①：門田光雅トーク「色彩を巡って」 11 月 6 日 (火)

関連企画②：原田郁トーク「自作紹介」 11 月 7 日 (水)

関連企画③：菊池遼トーク「『void』シリーズの成立について」 11 月 8 日 (木)



CS ギャラリー



ZOKEI ギャラリー



CS ギャラリー展示風景 左から

1.untitled 綿布にアクリル、洋金箔 91.8 × 59.8cm 2004

2.吹抜屋台 綿布にアクリル、カーボランダム 91.3 × 60.8cm 2018



日本の持つ美術の独自の立ち位置、地理的・歴史的な隔たりをむしろ、新たな視野を得るためのバネにして、制限や限界を跳躍するような表現の可能性や展望を模索している。近年では未完の作品に加筆をして新たな価値を与えるという新シリーズを中心に、色彩や筆致の関係を意識した大小様々なスタイルの作品を同列に制作・展開し、洋の東西を超えて文脈や伝統を継承しつつ再編することが出来る、今日の絵画の在り方を探求している。

1980 静岡県生まれ
2002 東京造形大学美術学科絵画専攻 卒業
2003 東京造形大学美術学科絵画専攻研究生 修了
2003～2005 東京造形大学絵画専攻教務補佐
2016～東京造形大学美術学科概念コース非常勤講師

■個展

2018 TELEPORT PAINTINGS (PARK HOTEL TOKYO/ 東京)
非時 (ときじく) の絵画 (M 画廊 / 足利)
2017 蕨しへの絵画 (M 画廊 / 足利)
ULTRA (SEZON ART GALLERY/ 東京)
2016 SLIDE (EARTH+GALLERY/ 東京)
STROKES (SEZON ART GALLERY/ 東京)

■グループ展

2017 CYA ! Modern / セイヤー ! モダン ~ to the next stage
(SEZON ART GALLERY/ 東京)
美藝礼讃 - 現代美術も古美術も (セゾン現代美術館 / 軽井沢)
2016 恋する現代アート (セゾン現代美術館 / 軽井沢)
2013 雲をつかむ作品達 (青梅市立美術館 / 東京)
2011 VOCA 2011 新しい平面の作家たち (上野の森美術館 / 東京)
2007 第26回損保ジャパン美術財団 選抜奨励展
(損保ジャパン東郷青児美術館 / 東京)
ART TODAY 2007 門田光雅・渡辺依理 (セゾン現代美術館 / 軽井沢)

web サイト <https://www.mitsumasakadota.com>



CS ギャラリー展示風景 左から

- 1.void #30 パネルにアクリル絵具 Φ 45cm 2018
- 2.void #32 パネルにアクリル絵具 Φ 45cm 2018
- 3.void #31 パネルにアクリル絵具 Φ 45cm 2018
- 4.void #33 パネルにアクリル絵具 Φ 45cm 2018
- 5.void #35 パネルにアクリル絵具、油性インク Φ 80cm 2018



ZOKEI ギャラリー展示風景 左から

- 1.void #39 パネルにアクリル絵具、油性インク Φ 38cm 2018
- 2.void #20 パネルにアクリル絵具 Φ 80cm 2017
- 3.void #38 パネルにアクリル絵具 32.5 × 32.5cm 2018

荒い網点によって構成される画面は鑑賞する位置によって見え方を変え、決して固定的な対象を描き出すことはない。離れて見る際には漠とした空間性が示されるが、それが何であるのかを確認しようとして近付けば、それは点の列に還元され姿を消してしまう。この画面には鑑賞における適切な位置は存在しない。常に近すぎ、また、遠すぎる。こうした知覚の揺らぎによって、鑑賞者の現実を揺さぶる体験を生じさせる作品を制作している。



void #39 (作品部分)

- 1991 青森県生まれ
- 2015 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻 卒業
- 2017 東京造形大学大学院造形研究科美術専攻領域 修了
- 2017～東京造形大学絵画専攻領域助手

■個展

- 2017 無／(分節) (Frantic Gallery/ 東京)

■グループ展

- 2017 派生する幹 -DERIVATION from the TRUNK-(SEZON ART GALLERY/ 東京)
- ZOKEI 展 (東京造形大学 / 東京)
- 2016 UNKNOWNNS 2016 (藍画廊 / 東京)
- M ポリフォニー 2016 - 原(形/型) - (東京造形大学 / 東京)
- 2015 2015 FRANTIC UNDERLINES (Frantic Gallery/ 東京)
- M ポリフォニー 2015 アンクル (東京造形大学 / 東京)
- 第二回 CAF 賞作品展 (アーツ千代田 3331/ 東京)
- 母袋ゼミ abflug 展 (アーツ千代田 3331/ 東京)
- TURNER AWARD 2014 入選・入賞者展 (turner gallery/ 東京、地方巡回)
- ZOKEI 展 (東京造形大学 / 東京)

web サイト kikuchiryo.com



ZOKEI ギャラリー展示風景 左から

1. Greeting flower (サンリオピューロランドーセルベイラ マーケット) 和紙にアクリル/マープリング、ステンシル、スクリーンプリント 205.6 × 241.5cm 2012、2018
2. 種子島宇宙芸術祭「おはながらート・プロジェクト（星原）」制作ドキュメント映像 2017



Greeting flower (サンリオピューロランドーセルベイラ マーケット) (作品部分)

2017年の夏休みは種子島で滞在制作をした。廃校の体育館を会場に、島で暮らす子ども達の絵を描いた。幅30m高さ7mの大画面に、みんなで作った1500枚の紋切りを貼った。その制作プロセスをスライドにまとめた。もうひとつは、近所のサンリオピューロランドでウチの娘の持った風船が、レジデンス先のポルトガル・セルベイラで見かけた親子の風船売りと繋がる心象風景。2012年にポルトで展示した。

話は戻るが、種子島行きが決まって、学食に「あなたの紋切りが欲しい」ボックスを設置した。島での制作は、造形大生も参加した。紋切りを作ってくれた学生にも見せたかったので、現地の制作映像と上述の過去作に学食で集めた紋切りをシルクスクリーンで刷り足した。

かつての学生が助手を経て現教員で、色んな人と一緒に制作したりしている。時間や場所を行き来しつつも今に繋がる、そんな個人の物語を伝えられたら良い。

- 1973 福岡県生まれ
- 1996 東京造形大学造形学部美術学科美術I類専攻 卒業
- 1998 長崎大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修 修了
- 1998～2000 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻 教務補佐
- 2005～2010、2011～2013 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻 非常勤講師
- 2013～特任准教授 2014～特任教授

■個展

- 2016 花は野にあるように (nohako/東京)
- 2012 「Hiroki Satake」[09「Hiroki Satake Paintings」] (PROPOSTA Arfrefx、Gallery M.A.P / 福岡)

■グループ展

- 2018 種子島宇宙芸術祭
- 2016 Fragile Story: Young Japanese Mokuhanaga Exhibition (WalaWala Foundry/USA)、(Victoria College of Art/Australia)
- 2014 第2回国際木版画会議「The Content」(東京芸術大学、CfSHE ANNEX Gallery/東京)
- 7th International Printmaking Biennial of Douro[12「6th」](Portugal)
- 2013 「Global Print」[11](Portugal)
- 2012 いま、日本のアートをつむぐ - てわざ・こまやか - (Por Amor a Arte Galeria/Portugal)
- 2011 AIR 「The 16th Biennial of Cerveira Artistic Residency」(Cerveira/Portugal)



ZOKEI ギャラリー 展示風景 左から

1.Search Results キャンバスにアクリル 35.7 × 56cm 2018

2.Search Results キャンバスにアクリル 40 × 48.5cm 2018



本シリーズはインターネット上の画像検索ページで画家の名前を検索した結果画面でその画家の作品画像が並んでいる状態を描いています。ここでは実際の作品がたとえ3mであっても、30cmであっても、画像は一覧性を優先し等しく高さを揃えたサムネイル画像となって並べられます。これはどんな名画でもそれがある場所や画面の凹凸、サイズなどを捨象され、厚みのない画像となって情報化されている時代の日常の風景でもあります。

1974 山口県生まれ

1999 東京造形大学造形学部美術学科美術I類卒業

2000 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻研究生 修了

2001～2004 東京造形大学教務補佐

2009～2013 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻非常勤講師

2016～東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻非常勤講師

■主な個展

2018 サーチリザルト (Maki Fine Arts/ 東京)
Unknown Sculpture No.7 #6 ジェネリック・オブジェクト
(galleryr21yo-j/ 東京)

2016 息づきの絵画 (Maki Fine Arts/ 東京)

2014 APMoA Project, ARCH vol. 11 末永史尚 ミュージアムピース
(愛知県美術館 展示室 6 ほか / 愛知)

2012 やまぐちアーティスト支援事業 末永史尚個展「かげり」
(秋吉台国際芸術村 / 山口)

■主なグループ展

2017 引込線 2017 (旧所沢市立第2学校給食センター / 埼玉)

2016 トランス / リアル - 非実体的美術の可能性 vol.3 末永史尚・八重樫ゆい
(gallery α M/ 東京)

TAMA VIVANT II 2016 美術—あいまいなパラダイム
(多摩美術大学八王子キャンパスアートテーク・ギャラリー / 東京)
(バルテノン多摩 / 東京)

2014 1974 年に生まれて (群馬県立近代美術館 / 群馬)

2013 VOCA 2013 (上野の森美術館 / 東京)

2012 アートプログラム青梅 2012 存在を越えて (青梅市美術館 / 東京)

web サイト <http://www.fuminaosuenaga.com>



Drawings 水彩、鉛筆 28 × 21cm × 9点 2018



2018年の1年間に366枚のドローイングを描いた。どのイメージも写真から、ものの形を見て短時間で描いたもので、鉛筆、水彩、デジタルなどいくつかのメディアで、また、線から面へ、面からデジタルへとそのあり方も変化させながら、繰り返し描いていった。

版の作品でイメージは、圧をかけ紙をめくった瞬間に出現する。版で感じた瞬間性への興味がこのようなドローイングを描かせたとも、ドローイングで瞬間に要素を絞られたイメージが版を作らせているとも感じている。

- 1980 長野県生まれ
- 2004 東京造形大学 造形学部美術学科絵画専攻 卒業
- 2006 愛知県立芸術大学大学院 美術研究科油画専攻 修了
- 2006～2010 東京造形大学絵画専攻教務補佐
- 2010～2014 東京造形大学絵画専攻非常勤講師
- 2015～2018 武蔵野美術大学版画専攻非常勤講師
- 2015～東京造形大学絵画専攻非常勤講師

■主な個展

- 2017 piece (Gallery 慳 SATORU / 東京)
- 2017 collage (gallery N / 名古屋)
- 2016 Drawings (switch point / 東京)
- 2015 上諏訪中学校 + 常田泰由 かたちをみつけて (諏訪市美術館 / 長野)

■主なグループ展

- 2018 シンビズム 信州ミュージアム・ネットワークが選んだ20人の作家たち (諏訪市美術館 / 長野)
- 2017 Poetry of Place 場所の醸す詩情 (The Koppel Project/ ロンドン)
Views of Contemporary Japanese Printmaking
(Famagusta Gate, Nicosia/ キプロス)
- 2016 ZOKEI NEXT 50 (Arts Chiyoda 3331/ 東京)
- 2014 4つの窓 長野ゆかりの版画家4人展 (須坂版画美術館 / 長野)
いろとかたちで探るワークショップ
(神奈川県立近代美術館 葉山館 / 神奈川)
- 2013 25x25: Contemporary Japanese & Australian Printmaking
(Japan Foundation Gallery/ オーストラリア)
- 2011 第7回造形現代芸術家展
(東京造形大学附属横山記念マンズー美術館 / 東京)

web サイト yasuyoshitokida.com



ZOEKI ギャラリー展示風景 左から
 1.みどりなこと 14.5 × 120cm スクリーンプリント、油性インク 2016
 2.MIDORI ちゃん W3 × D6.5 × H2.4cm 木に彩色 2016



Lucky you!!-good news-
 18 × 22.5cm スクリーンプリント、油性インク 2015



にちにちの - 香りのすみか -
 25.5 × 35.5cm スクリーンプリント、油性インク 2018

なんの変哲もない石ころや枯れた葉っぱ、貝殻や硝子を蒐集しています。それらを見つけ、触り、選びだすといくつかのものが残ります。なぜだかわからないけれど選んだものです。それらにはなにかの魅力が秘められていて、そのなにかを引き出そうと絵にしているのかもしれませんが。時には光に透かしたり、撫でたり、角度を変えて置いてみるとふとした瞬間にまた違った表情を見せてくれます。

私の作品には偏光性のパールインキが使用されていて、刷り重ねるほどに粒子が増しその下にある強い色は淡く薄れていく一方で、正面から捉えにくくなった色彩は観る角度を変えることにより保たれ続けます。時間や環境の変化で移りゆく色彩を追う姿勢は、まるで手にしたものを遠くから、あるいは虫眼鏡を通して細やかな世界を眺める行為とリンクしていると感じます。

- 1986 東京都生まれ
- 2010 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業
- 2012 東京造形大学大学院造形研究科美術研究領域修士
- 2014～2016 東京造形大学絵画専攻領域助手
- 2018～東京造形大学非常勤講師

■個展

- 2018 西平幸太 個展 - こぼれたはなし - (JINEN GALLERY/ 東京)
- 2016 西平幸太 個展 - ゆかいなもの - (JINEN GALLERY/ 東京)

■グループ展

- 2018 Little Christmas 2018- 小さな版画展 -(全国 35 カ所の画廊・美術館) -fragments- (JINEN GALLERY/ 東京)
- 2016 第八回詩意家居版画展 (華茂美術館 / 中国)
 第二回上海半島美術館日本版画招待展 2016 (上海半島美術館 / 中国)
 日本ブックデザイン賞 2016 (秋山孝ポスター美術館長岡 / 新潟)
 green premonition 緑の予感 (JINEN GALLERY/ 東京)
- 2015 阿波紙と版表現 - 素材への回帰 -(阿波和紙伝統産業会館 / 徳島)
 アーティストブック - それぞれの版表現 -(GALLERY NATSUKA/ 東京)
- 2014 7th international printmaking Biennial Douro 2014 (ボルトガル)
 Centrifugal;2014- コート・ギャラリー国立開廊 20 周年企画 - (CourtGallery/ 東京)
- 2013 ヤドカリトーキョー vol.09 秘密の部屋 - 恋する小石川 - (ヘルシーライフビル / 東京)
- 2012 CWAJ Contemporary Prints (Mercedes-Benz Connection/ 東京)
- 2011 第 11 回浜松市美術館版画大賞展 (浜松市美術館 / 静岡)
- 2010 第 7 回大野城まどかびあ版画ビエンナーレ展 (大野城まどかびあ/福岡)
 日本版画協会 第 78 回版画展 (京都市美術館 / 京都)

web サイト <http://nishihirakota.com>



ZOKEI ギャラリー展示風景 左から

- 1.GARDEN-WHITE CUBE #001 紙にインクジェットプリント 82 × 82cm 2010
- 2.GARDEN#001 (drawing) 紙にガッシュ 34 × 34cm 2009
- 3.GARDEN#002 (drawing) 紙にガッシュ 34 × 34cm 2009
- 4.GARDEN#002 (snap series) 紙にインクジェットプリント 94 × 75cm 2011
- 5.GARDEN#001 (snap series) 紙にインクジェットプリント 94 × 75cm 2011



わたしはコンピューターの中に家や公園のある架空の世界を作り、その世界で疑似体験した風景を描き続けています。今回は過去、私が参加した「rgb+」第一回目と第二回目に出品した作品を展示しました。また同時に約10年前に制作したドローイングも並んでいます。これは現在の作風になる直前の作品たちです。この架空の世界はのちに『inner space』と名付けることとなります。

- 1982 山形県生まれ
- 2005 東京造形大学絵画専攻領域卒業
- 2007 東京造形大学大学院美術専攻領域絵画科修了
- 2007～2010 東京造形大学絵画専攻領域助手
- 2017～東京造形大学絵画専攻領域非常勤

近年の展示

■個展

- 2018 NEW DIMENSIONS
記憶の断片を地図へと置き換えて
(地域の文化と本のあるお店 museum shop T/ 東京)
- 2017 IKU HARADA Solo Exhibition 2017 - circle -(Gallery Pepin/ 埼玉)
- 2015 原田郁 展「My Garden」(代官山葛屋書店 Anjin/ 東京)
遠い国 近い国 - 真夏のパースペクティブー (ART FRONT GALLERY/ 東京)

■グループ展

- 2018 CVJ Workplace Art Project (Yahoo! 株式会社 / 東京)
養老アート・ピクニック” 現実感芸術 Reality Arts”
(養老天命反転地 / 岐阜)
地域のなかのアートな居場所 Aplus × ATLIA
(川口市立アートギャラリー・アトリア / 埼玉)
ブレイク前夜～次世代の芸術家たち～(Bunkamura Gallery/ 東京)
- 2017 北参道オルタナティブ・ファイナル(プロジェクト・カバタ主催 / 東京)
Art Central Hong Kong 2017(Central Harbourfront Event Space/ 香港)

web サイト <https://www.ikuharada.com>



住処 キャンバスに油彩 97 × 162cm 2017



坂からの眺め キャンバスに油彩 97 × 145.5cm 2017

窓の外に広がる世界を眺める。

そこには長大な時間が築いた土地の形と人びとの営みがある。

目を凝らせば気づく速度で、或は感知できないほどゆっくりと留まることなく変化し続けている風景は、人の手によって形作られるものと、時にそれを凌駕する力、ふたつの均衡によって成り立っている。些末な事柄がつづく日常の道すがら、ふと目を奪われ立ち止まる。

たとえば矩形で切り取って見たとしたら、それは美しいものになるだろうか。

1971 東京都生まれ
1994 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻 卒業
1995 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻研究生 修了
1995～1997 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻教務補佐
2004～2008、2009～2012、2013～2017、2018～
東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻非常勤講師

■主な個展

2017 庭、前線 (ギャラリーカメラ / 東京)
2015 森へつづく (ギャラリーカメラ / 東京)
2013 はれ時々くもり (人形町 vision's / 東京)
2011 窓の外 (パーソナルギャラリー地中海 / 東京)
2008 道草 (ギャラリー千空間 / 東京)

■主なグループ展

2017 クインテット3-五つ星の作家たち
(損保ジャパン日本興亜美術館 / 東京)
2016 ZOKEI NEXT 50 東京造形大学創立 50 周年記念 美術学科卒業生展
(アーツ千代田 3331 / 東京)
2015 CSP3 絵画と彫刻のあり方 (桑沢デザイン研究所 / 東京)
2010 版画の色—リトグラフ (文房堂ギャラリー / 東京)
2008 VOCA 2008 現代美術の展望—新しい平面の作家たち
(上野の森美術館 / 東京)
2006 ふなばし現代美術交流展 06 ひかりあるところで
(船橋市民ギャラリー / 千葉)
2004 -Edges- 境澤邦泰・堀由樹子 (鎌倉画廊 / 神奈川)
2001 Chiba Art Now'01 絵画の領域 (佐倉市立美術館 / 千葉)

Web サイト <http://yhoririntam.wixsite.com/hori-yukiko>



zig saw パネルにアクリル 21 × 21cm 2010



envelope パネルにアクリル 30 × 30cm 2011

zig saw は、25 ピースのジグソーパズルを描きました。envelope は 2 種類の封筒を描きました。いずれも 25mm の厚みのパネルを作り、それに薄手の綿布を貼り、白色の下地用の塗料を塗り込んだ後、アクリル絵の具を塗って仕上げました。

1974 神奈川県生まれ
1998 東京造形大学造形学部美術学科美術Ⅰ類卒業
1999 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻研究生修了
2000～2001 東京造形大学教務補佐
2011～2014、2018～
東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻非常勤講師

■おもな展覧会

2011 第七回造形現代芸術家展
(東京造形大学附属横山記念マンズー美術館 / 東京)
2010 camaboco (東京造形大学旧絵画棟 / 東京)
マスクングと絵画 (kabegiwa / 東京)
2008 The House - 現代アートの住み心地 -
(日本ホームズ住宅展示場 / 東京)
ニューバランス (Gallery Archipelago / 東京)

特別収録①

門田光雅トーク「色彩を巡って」

日時：2018年11月6日(火)13:30～14:30

場所：CSギャラリー

今年は、私が1998年に東京造形大学に入学してから、つまり画家を志すことを本格的に決めてから、ちょうど20年になる年です。そのような私にとっても節目の年に、「rgb+」という東京造形大学の象徴でもあり、絵画専攻領域の教育の軌跡を束ねるような、その10回目となる記念すべき展覧会に招聘をいただいたという事もあって、出品作品を吟味したくアトリエを整理してみたところ、私が助手時代の2004年に制作した「untitled」という懐かしい作品が出てきました。そのような時、完成したばかりの最新作「吹抜屋台」が、たまたま同サイズで、見えない何かを誘うような偶然が重なり、かつての鮮度や至らなさ、今日の成長や課題も含めて、多重的な「+」の意味がある本展で、在学時と現在の姿を並列させ対比して見せたいと思ったことが、この展示になっています。

今回の機会を得て、こうして改めて作品を見比べてみると、在学時は、社会の表層に対する装飾的な感覚を作品の工芸性や絵画の平面性として表現していたことに対し、現在では、日本の持つ伝統的な感覚や美意識といった自身の内部から発信できるような表現の探求をする、といった一見すると表現に類似するようなどころがありつつも、部分と全体、表層と深部、影響と発信、というような視点の変化、制作を掘り下げる方法にも差異がある事が、新鮮な発見となりました。

このような変遷の経緯を自分自身でも振り返りつつ、今日の私に至るまでの出来事や巡り合わせなどを、このタイミングに少し思い出話的に掻い摘んで紹介をしたく、取り留めもない昔話かもしれませんが、それらが何か学生の皆さんの今後の参考や、制作のヒントの一つにでもなる事が出来れば幸いだと思いました。手短かに私の現状や生い立ちの紹介をすると、現在私は38歳になり、結婚をして二児の父親です。今日のように大学でも少々教鞭をとりつつ、生活と平行して制作と作家活動を頑張っています。私の生まれは静岡の田舎で、母の実家で育ちました。海のそばで、砂浜や小さな漁港・田畑などが遊び場でした。と言いますか、正直特に何もなくて「よくこんなところで絵を描こうと思ったね」とカミさんに笑われた事があるくらいで…。小さい頃から落ち着きがない多動児で、周囲に心配をかけてしまう事がよくありました。小学生の頃は、物怖じせずグラウンドで、大声で校歌を歌っているような子だったと、当時の恩師が教えてくれました。境遇もあつたのかもしれませんが、幼い頃から少し何か「気持ちがかみ出している様な部分」があつたと思います。周囲の支えもあって、取まらない衝動は、運良く何かを表現をするという事と結びついたようで、中学生になる頃から、徐々に美術の道を考えていくようになりました。

私は、物を作る事は大好きで得意ですが、生まれつきセンスがあるようなタイプの作家ではないと思っています。むしろ、失敗や葛藤の中で、出口を探すように一つ一つ経験を重ねる事で、少しずつ表現の幅を広げていきます。実際、美大へと進路を決めた後、上京して本学に入る事が出来ました。が、正直学生の頃は、絵を描く理由も、その意味もよくわからない状況が随分と続きました。「只々何かを作りたい」という、気持ちだけは人一倍ある、といった状態で、絵を描く理由がうまく見つからない代わりに、制作の傍ら支持体ばかり大量に作ったり、関係のない大工仕事で発散したりと、絶えず手を動かすことだけは止めませんでした…。今思えば、そのような事が作品の身体的な感覚や工芸性として結びつき、自身の職人的な気質や構築的な感覚も形成したのではないかと、思います。

卒制ではZOKI賞(卒業制作優秀賞)を頂きました。ただ内容は実にナイーブで反省点も多いのですが、あの時期にしか出来ない表現の不敵さを刻んだからこそ、その後の美術の世界に身を投じる覚悟もできたのではないかと、思っています。

ただやり場なく気持ちだけは先行した学生・助手時代ではあつたと思いますが、無意味にも見えたガムシャラな日々は、時が経って私の作家としての血肉や骨格になっているのだと、今改めて振り返れば、なくてはならない大切な時間だったと切に感じます。私のHPを見てもらうと分かりますが、その助手の任期が満了し大学を離れる年を、私という人生の一つの基底にして、作家としての出発の意味も込めて、そこから展示と作品を、年を追う毎に上方に重ね紹介していく形になっています。掲載している作品数は、今日(2018年11月現在)までで、主に展示・発表した作品を中心ではありますが、600点ほどとなっています。こうして制作の展開を時

系列に辿ってみると、その時々々の生活の起伏に沿って、私の気持ちの浮き沈みもそのままに色彩の明暗や作品の表情に現れているというような、ある意味、赤裸々なアーカイブとも言えるかもしれません。しかし、それは同時に、手探りの中で、様々な角度から表現への挑戦と格闘を続けてきた形跡であるようにも感じています。

確かに、最初期の頃は、ステイニングから始まり、アメリカ抽象表現主義の影響が色濃い作風なのですが、長期に渡り、制作の量や幅に触れていったことが結果的に、フォーマルに特化することで他のジャンルを排した抽象表現主義の当時の姿勢や背景への理解に通じ、その視野の硬直に対する反動がむしろ今日の美術表現の柔軟性や多様性に繋がっている事を、身をもって経験として気付くことができたように思います。その成果として今日では、不自由がむしろ自由を求めるためのきっかけとなるような、制限や限界を跳躍することで見る事が出来る、表現の可能性や展望に私は巡り会いたいと思っていて、近年では未完の作品に加筆をして新たな価値を与えるという新シリーズを中心に、日本というこの場所から発信ができる新しい価値基準の模索や、地理や歴史に捉われぬ自在な表現の在り方を探求しています。

足早で、大まかではありましたが、大体このように、学生の頃から課題や未熟な面が多分にある私ですが、緩やかに成長できた分、じっくりと試行錯誤の中で、今日に至ることができたのではないかと、思っています。また、このような私を導いてくれた様々な出会いや出来事があることを、忘れることができません。現在、お世話になっている軽井沢のセゾン現代美術館や、足利のM画廊などは、学生のときに足を運んだ展示に大きな刺激を受けて、制作と美術に向き合うための姿勢や意識を改めた記憶があります。その後、縁があって展覧会や取り扱いの話ももらいましたが、それは常に作家としての力量を試されているような状態で「展覧会とは、そこに作品を並べられる幸福と、並べられてしまった不幸に、否応なく直面する厳しい場だということですよ」と、かつてセゾンの館長から頂いた言葉が忠告する通り、今でも全く甘くない真剣勝負の世界であると痛感しています。

もちろん色々な作家の在り方があると思いますが、人間性や表現を、正面から向き合い・受け止めてもらえる存在があるかが、作家の成長には不可欠で、様々な努力を惜しまない当然や、自分自身を信じる強さと勇気を、気づかせてもらうことができる相手や場所に巡り合えることが、表現者の幸運ではないかと思っていることを、学生の皆さんへ作家の意見として、今回のお話の終わりに添えたいと思います。そして最後に、学生時代から今日までご指導をいただいた母袋先生に、重ねてお礼申し上げます。

2018年11月 門田光雅



特別収録②

常田泰由×原田郁 対談 『『rgb+』の立ち上げ時について』

収録：2018年12月28日

菊池（以下 K）：東京造形大学絵画専攻助手展「rgb+」が今年10回目を迎えました。これまでの振り返りの意味もこめてこの助手展の立ち上げに関わられた、常田泰由さんと原田郁さんに当時の様子を伺ってみたいと思います。今日はどうぞよろしくお願いたします。

常田・原田（以下 T・H）：よろしくお願いたします。

K：まずは第一回目が開催された2009年当時の大学の様子を伺えますか？

H：2009年という東京造形大学に大学院が出来て4年目（大学院造形研究科造形専攻・修士課程が2005年に開設される）を迎えていましたが、変化のひとつとして大学院棟の一階に ZOKEI ギャラリーが新設されたんです。それまではマンズー美術館で例外的に開催される学生展以外に学生が展示できるスペースは限られていました。唯一絵画棟には学生の自主運営のオルタナティブスペース「node」が存在していましたが、翌年に新棟建設のために立ち消えになります。そんななか母袋先生が授業の一環としてなら借りれるスペースがあるのだけれど、君たちは興味あるかい？というように感じて ZOKEI ギャラリーについて声をかけて下さいました。

T：そうだったね。学内で学生がもっとゆるやかに成果発表できる、そういう中間的な場所がそれまでなかったんだよね。ちなみにその時の僕らの呼び名は助手ではなくて教務補佐というものだったんだけど、造形大に大学院ができる前は、研究生制度があって研究生は各コースの研究室の共有道具や資材などもろもろ管理してくれていた。でも研究生の存在が無くなってそこらへんの業務も全部、教務補佐が担うことになったんだね。院が出来たことによって僕たちの仕事内容や役割がより明確になってきていた。この時、僕は教務補佐4年目かな。

H：私は3年目だった。で、もうひとり大きな存在のリンちゃんこと平嶺林太郎くん。林太郎くんは2年目で、この年この3人で教務補佐の仕事をやっていました。で、何から話せば良いのかな。その当時のことで憶えているのは美術業界でバブルのようなものがあつたこと。2005年辺りからなのかな？いわゆるコマース画廊というものが乱立して、アート市場の活性化が行われ始めた。そこで求められたのが美大在学中の学生の絵だったりもして。美大生の青田刈り〜とか言われてたのを聞いていました。それまで美大生が展示をしたいとなったら、一生懸命にアルバイトして貯めたお金20万円くらいを貸画廊に費やして、それでも一週間しか借りれないとかそんなだった。

T：いやもつとしたかも、30万とか。

K：そうなんですな...！貸画廊の事情はちらっと聞いたことはありました。

H：私の印象では、学生たちの半数はそういった外側の美大生の青田刈りの動向に興味を引かれて、気持ち外へ外へ。確かにキラキラして魅力的に映りますよね、うまくいけば展示場所にお金がかからないということもあるし。個人的に十分そういう気持ちは理解してはいたんですけど、こう、学内を見渡すと全体的に造形大学に通う意味とか学内で制作する意味みたいなのが薄れていく、そんな匂いが一方ではして。勝手な想像ですが教授や非常勤の先生方も戸惑われていた部分があったと思います。多分これは教務補佐という立場だったから感じたことなのだと思いますけど...。だから東京造形大絵画の良い雰囲気づくりをその当時の立場でできる事ってなんだろう？とか考えてはいました。そんな、もやもやしていたタイミングで ZOKEI ギャラリーの使用について声をかけてもらったと記憶しています。

T：それと、僕たち教務補佐は授業準備や機材の貸し出しなどを行っていたわけだけれど、この教務補佐というポジションは当時の絵画専攻と彫刻専攻にしか配置されていなくて、大きくみて学術的には認知度の低い立場だった。そろそろ助手制度を導入したいという話を聞いていたけれど、じゃあ前身の教務補佐とはどんな人間なのか、まずそこが全く伝わって

なかった。というか僕たちが作品制作をしているのも知らない人が多かったよね。それと実は教務補佐の先輩たちと何年間か「森の展覧会」という展示を高尾の森でやっていたんだ。後々、文房堂ギャラリーでも開催したけど、なかなか会場が遠くて多くの人に観てもらえないという状況だった。そういうのもあって、この第一回目の「rgb+」は僕たちの普段の制作や研究部分、存在自体の表明になった気がする。

K：ではもう少し具体的に、この展覧会名「rgb+」の由来や立ち上げの際のエピソードなどがあればお聞きしたいのですが。

H：まず展覧会名については様々に考えました。キャッチーで普遍性がある...とか。さっきも話した通り、その時は私達が東京造形大学で展覧会をやるという意味を第一に考えました。強く打ち出さないと。最終的に大学のスクールカラーの赤、青、緑、光の三原色にピンときて「rgb」を採用しました。絵画専攻の助手展ならば色の三原色 CMY(K) であろうところ、うーん、でも、色よりもまず光の存在が前提にあるわけだし、常田、原田、平嶺の3人の「3」という数字にもこだわりたいし、とか。なんといつても光の三原色がいいなと決め手になったのは光はエネルギー体だから、ということでした。新しいことを立ち上げるためには熱量が必要だったから。そして、そこからこのステイトメント（※1）が生まれました。すごく悩んで簡潔に想いをまとめたので、結構気に入ってます（笑）

T：僕と原田さんとで頑張ったよね〜ステイトメントのこの辺りはね。

H：うん、頑張ったよね。

（※1）：『本展のタイトル [rgb] とは光の三原色 red / green / blue です。三色の色光はその組み合わせであらゆる色調を作り出すほか、混ぜるほどに明度が増しエネルギーが高まります。そのエネルギーの高まりは、本展の三種三様の表現の響き合いで高められる作品のようでもあります。この私たちの作品が新しい時代・今に焦点を結び、表現と創造の可能性を示す光になることを願いながら、時代性やそれぞれの独自性を [+] した新しい表現をこれからも探求していきます。』

H：で、少々内輪の話になりますが、今の私の夫は東京造形大学デザイン専攻でアドバタイジングを学んでいたんですが、卒業後にデザイン事務所に就職し一足早く社会と接点を持って活動していました。常田さんとも仲の良い間柄だったのもあり、展覧会のリーフレット制作について相談を持ちかけたんです。彼にロゴ作成やレイアウト、文字組みをお願いしました。表紙のイラスト3人の頭部の似顔絵がありますけど、それも描いてもらったんだ。予算の関係もありましたが、まずは収集しやすいサイズ感を探って結果 A5 判のジャバラ折に決定しました。それで今後展覧会が継続していく場合はロゴとサイズ、フォーマットを踏襲させていくことにしました。制作中にデザイナーである彼によく言われたのが、シンプルな DM デザインは誰にでも作れるかもしれないけど、ここは美大だし、隣にはデザイン専攻の人間がいっぱいて、力を借りるには最高の場所。専門知識のある人に助けをもらおうと仕上がり全然違う。だから協力してやっていけばいいだけの話だ、と何度も聞かされました。なるほどなーとは思いつつ、まだ大学全体が専攻別、縦割り組織感が強くて、その分私もマルチタスクでなければという強迫観念がありました。でもリーフレットが刷り上がってみて彼の言っている意味がよく理解できたんです。なのでそこからはだいたい先の話になってしまふけど、助手展引き継ぎの際にリーフレットは積極的にデザイン専攻の学生を引き入れていって欲しいという旨を伝えてました。

T：でも最初にリーフレットに力を入れたのは本当に意味があった。その流れで会場づくりまでの意識がぐっと高まった気がするよね。それで今日はここに居ないけれど、もう一人のメンバー、平嶺林太郎くんのスペックがこの後光り出す。林太郎は作家活動もしていたけど、普段から外にオルタナティブな場所を探しに出たり、プロジェクト型のアートイベントを立ち上げたり、人を集めて“展覧会をつくる”活動をしていた。だからあの

展示しにくそうな味気ない ZOKEI ギャラリーをどの様に活用してインストールするかという部分で、色々な知恵を貸してくれた。アイキャッチになる作品を入口付近に配置したり、パーテーションを大型でしっかりしたボックス状にしたり、空間をあえて斜めに切るとかね。3人でもアイデアをいっぱい出し合った。

H：思い出すと楽しかったね、夜な夜な。授業準備の後しか動けないし、やり切りたかったから最後は警備員さんをお願いして3人徹夜で準備した。なんか卒制みたいだったなと。実際、開催時期が卒制の前だったので私達もいい緊張感があったのを覚えてます。

K：ふふふふ。

K：それでは開催後どんな反応がありましたか？例えば教授陣などから何かコメントはありました？

T：かなり真剣にやったからね、僕たちのその真剣さは伝わったんじゃないかな...。実際、僕たちを機材貸し出ししてくれる人だと認識してた学生は、作品を通して僕たちが作家活動をしていることを初めて認識してくれた。

H：常田さんはそれまでも学外でコンスタントに制作発表していたんだけど、それでも学内で展覧会を開いたことでわかりやすく反響はあったんじゃないかな。やっぱり学内でやる意味は大きかった。それで、私は当時の4年生と大学院生が何度も繰り返し観に来てくれたのを覚えてます。感度のいい学生達はかなり興味を持ってくれて。で、ZOKEI ギャラリーってこんな風に魅せるんだ！いつもと全然違う空間に仕上がってる！みたいなコメントは沢山もらいました。大袈裟だと思うけど初めて学内で展覧会に出会った、みたいなことまで言ってもらって。3人それぞれの能力を結集させた結果...大成功だったんじゃないかな。そういえば教授達からはこういう言葉ももらったかは覚えてないなあ、どうだったんだろう。

T：そうだね。

K：じゃあ、そこはさりげなく僕がヒアリングしておく事にしましょうか(笑)
その頃って、助手と学生とで作品の話をする機会ってあったんですか。

T：僕は版なので学生と共有の刷り部屋だったから、自然とコミュニケーションはあったよ。

H：私は展示後に助手部屋を突きとめられて、勝手に覗かれてみたい。気付くとお菓子が置いてあったり「新作みました」とか突然声をかけられたり。分厚いファイルを持ってきて見て欲しいと言う学生さんもいました。林太郎くんなんかは、それこそ大人気で、いつもワサワサ学生を引き連れてた(笑)！

K：僕が学部生の頃は、青木豊さんと丸山恭世さんととてもお世話になっていました。そのお二人が作家としての姿を見せてくれて、それに僕はかなり影響を受けたので、僕も今助手という立場になって学生には積極的に作家の姿を見せようとしているんです。その精神はその前から始まっていたんですね。

H：その後、17年の歴史を持つかまぼこ型の旧絵画棟が壊される事になって、そこで最後に助手と学生達とでかなり大きな展覧会を企画しました。(『camaboco』展/2010年)気が付いたら、絵画専攻の学生の制作や展示への意識がそれはそれはもの凄い高まりをみせていて、私も圧倒されました。学内がかなり熱かったと思います。最初の思惑からしたらこの流れと結果も大成功と呼べるのでしょうか。その後CSプラザが完成したり、様々なインフラが整って全学科に助手が配置されて....。大学単位の助手展が開

かれることにも繋がって行ったのではないかなと推測します。でも私達3人は「rgb+」でその当時やるべきだと思った事、自分達がやれる事に全力で向き合ったというだけで、あとは後続の助手さん達に託したんですけど、このように10回も続いていて素直に嬉しいです。そして今回は歴代教務補佐の先輩、先生方をお呼びして一緒に展示ができたのも記念に残ることですよね。

T：今後も続けていくなかでは開催する意味合いや意味付けが変化していくと思います。そこが難しいところでもあるけれど、絵画専攻助手のひとつの歴史になりかけているし、バトンを良い形で渡して行って貰えたら嬉しいです。

K：今日はありがとうございました、色々当時のお話を聞いて楽しかったです！

T・H：こちらこそ、ありがとうございました。

(2018年12月28日 常田泰由さんのスタジオにて)



出品作品リスト

門田 光雅	untitled	綿布にアクリル、洋金箔	91.8 × 59.8cm	2004
	吹抜屋台	綿布にアクリル、カーボランダム	91.3 × 60.8cm	2018
菊池 遼	void #20	パネルにアクリル絵具	Φ 80cm	2017
	void #30	パネルにアクリル絵具	Φ 45cm	2018
	void #31	パネルにアクリル絵具	Φ 45cm	2018
	void #32	パネルにアクリル絵具	Φ 45cm	2018
	void #33	パネルにアクリル絵具	Φ 45cm	2018
	void #35	パネルにアクリル絵具、油性インク	Φ 80cm	2018
	void #38	パネルにアクリル絵具	32.5 × 32.5cm	2018
	void #39	パネルにアクリル絵具、油性インク	Φ 38cm	2018
佐竹 宏樹	種子島宇宙芸術祭「おはながらート・プロジェクト(星原)」	制作ドキュメント映像		2017
	Greeting flower (サンリオ ビューロランドーセルベイヤマーケット)	和紙にアクリル マーブリング、ステンシル、スクリーンプリント	205.6 × 241.5cm	2012、2018
末永 史尚	Search Results	キャンバスにアクリル	35.7 × 56cm	2018
	Search Results	キャンバスにアクリル	40 × 48.5cm	2018
常田 泰由	Drawings	水彩、鉛筆	28 × 21cm × 9点	2018
西平 幸太	Lucky you!!-good news-	スクリーンプリント、油性インク	18 × 22.5cm	2015
	みどりなこと	スクリーンプリント、油性インク	14.5 × 120cm	2016
	MIDORI ちゃん	木に彩色	W3 × D6.5 × H2.4cm	2016
	にちにちの - 香りのすみか -	スクリーンプリント、油性インク	25.5 × 35.5cm	2018
原田 郁	GARDEN#001 (drawing)	紙にガッシュ	34 × 34cm	2009
	GARDEN#002 (drawing)	紙にガッシュ	34 × 34cm	2009
	GARDEN-WHITE CUBE #001	紙にインクジェットプリント	82 × 82cm	2010
	GARDEN#001 (snap series)	紙にインクジェットプリント	94 × 75cm	2011
	GARDEN#002 (snap series)	紙にインクジェットプリント	94 × 75cm	2011
堀 由樹子	坂からの眺め	キャンバスに油彩	97 × 145.5cm	2017
	住処	キャンバスに油彩	97 × 162cm	2017
村林 基	zig saw	パネルにアクリル	21 × 21cm	2010
	envelope	パネルにアクリル	30 × 30cm	2011

「rgb++ 2018 exhibition vol.10」

【出品作家】

・現助手
菊池遼

・助手出身ゲストアーティスト

門田光雅
佐竹宏樹
末永史尚
常田泰由
西平幸太
原田郁
堀由樹子
村林基

| 会期 | 2018年11月1日(木) - 11月10日(土)

※ 11月3日(土)、11月4日(日)は休廊

| 会場 | 東京造形大学 ZOKEI Gallery (大学院棟12号館1階)
CS Gallery (絵画棟10号館1階)

| 開館時間 | 10:00 - 17:00 ※最終日11月10日(土)は16:00閉廊

| 関連企画 |

①: 門田光雅トーク「色彩を巡って」 11月6日(火) 13:30 ~ 14:30

②: 原田郁トーク「自作紹介」 11月7日(水) 12:20 ~ 13:20

③: 菊池遼トーク「『void』シリーズの成立について」 11月8日(木)

・第一部

菊池遼×母袋俊也

対話「学部時代の作品展開から見る菊池作品のテーマについて」

時間: 16:00 ~ 16:30

・第二部

菊池遼

トーク「『void』シリーズの成立について」

時間: 16:40 ~ 17:30

| 企画 | 母袋俊也

| お問い合わせ | 東京造形大学絵画事務室 TEL:042-637-8423

| アクセス | 東京造形大学 〒192-0992 八王子市宇津貫町1556

JR 横浜線 相原駅「東口」→ 大学 (徒歩15分 / スクールバス5分)

| 冊子デザイン・編集 | 菊池遼

| 刊行 | 2019年3月

